Career
Design
Support
Magazine

R STYLE

キャリアデザイン応援マガジン
麗澤瑞浪中学・高等学校 アール・スタイル

2016
SPRING
Vol.1

スタートラインはみんないっしょ。

迷ってもいい、経験が積み重なるうちに道は自ずと定まる。

安藤恵理子

1987年生まれ。岐阜県瑞浪市釜戸町出身。麗澤瑞浪中学・高等学校卒業。北海道大学人文学部人文科学科卒業後、北海道テレビ放送入社。報道部記者・ディレクターとして活動。2014年2月～2016年2月まで青年海外協力隊としてバングラデシュに派遣。

日本を飛び出し、世界を舞台に活動する安藤さん。その生き方の根底にある考え方や数々の経験から学んだことなどを教えていただきました。

北海道大学時代

大学進学を決める時点では、何をしたいのか、はっきりとしたものはありませんでした。宇宙飛行士や探検家になりたかったり、心理学に興味を持ってみたり、なかなか定まりませんでした。地元から遠く離れた北海道へ行くことに、躊躇することはありませんでした。その理由には、地元のばあちゃんたちに小さい頃から「えりちゃん、えりちゃん」ってかわいがってもらって、愛情をたっぷりもらったことが影響していると思っています。このたっぷりの愛情に恩返しするために、「次は私が誰かのために何かできる人になりたい」という前向きな気持ちになれたので、距離などはあまり気になりませんでした。

大学入学後は、中学時代よりずっと続けてきたテニス部に入部し、毎日コートに通い練習に励んでいました。一方で私はこのままテニスだけに打ち込む4年間でいいのか考えていました。「誰のためでもなく、ただ部活をしていていいのだろうか……。」そんな時、以前、麗澤瑞浪中学・高等学校でお世話になった先生から、地雷撤去のためのステッカーを販売している先輩の話を聞いたことを思い出しました。いてもたってもいられなくなり、海外ボランティアに行くことを決意して行動に移しました。「人と異なることがしてみたい、知っている人も誰もいない、言語も異なる環境で自分に何ができるのか知りたい」という気持ちで飛び込んだボランティア。行き先は、メキシコ西海岸で、ウミガメ保護のボランティアをしました。このときは、10ヵ国から18人の若者が集まり、約1ヵ月間活動しました。みんなで自炊をして、シャワーは井戸水、寝袋で寝る生活。言語や国、環境の違いに苦労もしましたが、さまざまな学びを得ることができました。遠い人のためにできることもあるけれど、近くにいる人のためにできることもとても尊い、そのように感じた海外ボランティア経験でした。その後は、まずは自分の目の前の人たちを大切にしたいと思い、テニスを続けました。4年次には主将としてチームをまとめ、エースとして団体戦で勝利して仲間を喜ばせることができました。

テレビ局への就職

就職の時に優先したのは、学生時代に打ち込んだテニスから学んだことでした。1つ目は、チーム作りの楽しさ。一人ひとりに役割があって、それを活かしてチームを作り上げていくことの素晴らしさを今後の人生でも味わうことができたらいいなと思いました。2つ目は、人の心を動かす場所で働きたいということです。さまざまな企業の中からご縁があったのは、北海道テレビ放送でした。

テレビ局では報道部記者兼ディレクターとして、毎日、事件・事故の現場にカメラマンと出かけて取材をして、夕方のニュースを作っていました。また、月に1、2本、8分程度の特集を作っていました。入社したのは東日本大震災直後でもあり、泊発電所（北海道にある原子力発電所）や農業被害の現場ばかりに出かけていた記憶があります。入社3年目に、福島県に10日間、応援記者として出かけました。「声なき声を拾うこと。」自分が伝えてきたニュースの元がここにあったと心から実感しました。福島の記者とカメラマンが、世の中から薄れつつある福島県の現状を届けよう、ニュースを絶やさないようにしようと、一生懸命にニュースを発信する姿を鮮明に覚えています。この時、記者として「現場に行かないと分からないことが多い」という大きな学びがありました。

青年海外協力隊に

メキシコで国際ボランティアをした大学1年生の時から、途上国のために自分に何ができるのかという気持ちは持っていました。途上国のことについて、考えること、思うことはあるけれど、実際にどんなことが起きているのか、気になっていました。記者として、実際に行ってみないと分からないということ、さらに、私が取材しないと消えていってしまう声があることを経験していたので、行くなら今しかないと思いました。独立行政法人国際協力機構（JICA）のホームページを調べていると、「コミュニティFMの番組制作支援」の仕事を見つけられたので、自分の経験を活かすことができると、テレビ局の退職を決意しました。

バングラデシュへ

私が派遣されたのは、バングラデシュ。バングラデシュは、インドの東側にある人口約1億5千万人、約9割がイスラム教徒、色違いの日の丸という日本に似た国旗を持つ国です。公用語はベンガル語で、首都はダッカです。私が活動していたのは、その首都ダッカからさらに約300キロ離れたチャパイナワブゴンジ県というところでした。

派遣先・派遣内容によっては、先輩の派遣隊員がいることもあるのですが、私の派遣先には、前任者もその他の協力隊員もおらず、何を協力するのか、何を支援するのか、すべてを自分で生み出していかなければならないゼロからのスタートでした。勤務しているのは、チャパイナワブゴンジ県の半分程度のエリアをカバーしている「ラジオモハナンダ（Radio MAHANANDA 98.8MHz）」。ラジオ番組の制作支援のつもりで出かけていったのですが、すでにラジオは毎日きちんと放送されていて、私が考えていたような番組もすでに存在している状況でした。挙句の果てには、現地の方に、「君は何しに来たんだ。留学生か？」と言われてしまいました。現地に入ったものの、ベンガル語も難しく、何もできずに焦る日も多かったことを思い出します。

現場に飛び込んでみる

最初の3ヵ月は、とにかく現地のことを理解しよう、すべてを体験してみようと考えました。とにかく現場に飛び込んでみる、このような状況でもへこたれずにがんばれたのは、記者の経験があったからだと思います。村を巡回してビデオを回し、色々とインタビューをしました。夜にはビデオを見ながら、どんなことが問題なのか、どんなことが幸せなのか、自分なりに分析をしました。分からないベンガル語も辞書を引きながら調べました。イスラム教の行事であるラマダン（断食月）には、私も一緒に断食をしました。断食も、やらなければ現地の人の気持ちは分からないという思いから始

めました。断食は、空腹、喉の渇きに耐えなければならず、仕事の効率は落ちるし、健康にも良くない、そう思いましたが、これは日本人である私の感覚でした。現地の人たちは、「お腹は空くかも知れないが、私たちは今幸せなんだ」という言葉を口にします。断食の月を通して神の教えを守り、欲望を押さえ、貧しい人たちに恵むのが、彼らの持つ「幸せのカタチ」なのだと気づきました。「理解する」とは、英語で「understand」と書きますが、同じ目線に立ち、同じ生活を経験することで、その人や暮らしを知ることができると感じました。断食を一緒にやることで喜んでもらえたし、現地の方々の輪の中に入り込むことで、現地での課題も見えてきました。

バングラ版のラジオ体操づくり

見えてきたのは、夜遅くに揚げ物や油で煮たようなカレーを食べたり、とてもとても甘いおやつを食べる食生活の課題でした。途上国なので飢えているのかと思いきや、現地では糖尿病が深刻な問題となっていました。学校では体育の授業がないので、運動習慣もありません。優しい言葉で言えば、ぽっちゃり体型の方がとても多いのです。派遣されて半年ほど経ってから、私がプロデューサー兼パーソナリティとして、ベンガル語で番組を担当させてもらいました。主に日本の文化について伝える内容だったのですが、その中で、日本の健康向上の取り組みとしてラジオ体操を紹介しました。そのときピンときたのです。バングラデシュに、日本のラジオ体操のようなものがあれば、糖尿病の解決に役立つのではないかということを。そこで早速、各国のラジオ体操について調べました。すると、中国、韓国、インドネシア、カンボジア、ネパールにもあるということが分かりました。そして、ネパールのナマステ体操は、昔の青年海外協力隊が作ったものだということも分かりました。バングラデシュでもできるのではないかと感じました。すぐに国立スポーツ学院に出向き、各国にある体操の動画を見せながら、バングラデシュらしい体操を作りませんかと提案しました。すると、「日本人の恵理子には、この国の体操は作れな

い。」と言われました。とても驚きましたが、その後に続く言葉を聞いて、さらに驚きました。「色々な国に体操があることを我々は知らなかった。そのアイデアはもらった。バングラデシュらしい体操と言うならば、日本人のあなたじゃなくて、バングラデシュ人の我々が作れる気がする。さあ、作り始めよう!」と言ってくれたのでした。日本の支援を待つのではなく、バングラデシュ人が「自分たちから始めよう」と、奮起してくれたのです。それから約2ヵ月、スポーツ学院の体操部と共に体操づくり合宿を行いました。バングラデシュ人たちとゼロから体操を作り上げるのは、とても一筋縄にはいきませんでした。バングラデシュには、体育だけでなく音楽の授業もないので、リズムに合わせて体操することに苦労しました。このように、課題にぶつかりながらも、「誰もができる国民的な体操」をスローガンに、バングラデシュ人と共に一つひとつの動きを作りました。

できあがった体操は、国民的行進曲である「チョルチョルチョル」という曲を使っているため、「チョルチョル体操」と言います。動画配信サイトなどで検索してもらうと実際に見ることができるので、是非ご覧ください。

完成後は、各地を回り体操の普及に努めました。学校、企業、糖尿病センター、メディアなどを訪問して、体操を教えました。ラジオの番組制作支援で来たはずが、最後は、バングラデシュで体操のお姉さんになっていましたね（笑）。私が帰国した後も体操づくりに協力してくれた国立スポーツ学院では、毎週の全校朝礼でチョルチョル体操を続けてくれています。私たち、青年海外協力隊ができることは、種まきのようなものです。チョルチョル体操をきっかけに、今後バングラデシュ人が自分たちで健やかな国を目指してくれれば、と心から願っています。

安藤さんから中高生へのメッセージ

中学・高校時代は、やりたいことが定まらず悩むこと、迷うことの多い生徒でした。しかし、私の母校の先生方は、包容力がありました。実は、高校時代は文系から理系へ、その後再び文系へ戻るという進路変更をしました。迷惑をかけましたが、何がやりたいのか、迷いに迷ったその時にも、その気持ちを大切にしてくれる先生方に恵まれました。そのおかげで、大学時代、社会人時代を通して、「何がやりたいのか、それを見つけるまでぶつかり続けよう」と思える気持ちのゆとりができました。また、全国から生徒が集まる環境もすばらしかったと思います。中学時代から、九州、関西、関東など、文化の異なるところから友達が集まっていて、とても多様性のある環境でした。違い、多様性を受け入れながら、いろいろな人がいていいんだと素直に認められるようになりました。また、私の出身は岐阜県瑞浪市ですが、全国からやってきた友達と接することで、私自身もどこにでも行っていいんだという柔軟性、自由な心を得ることができたと感じています。

高校時代の唯一の心残りは、留学に行かなかったことです。せっかく、留学制度が整っている高校だったのに……。留学に行き、英語が話せていたらもっと世界が広がったのに……。しかし、その心残りを解消すべく、私はこの4月からフィリピンに語学留学をし、その後はアメリカの映画学校でカメラや編集の勉強をする予定です。日本（特に地元）の良き文化がなくなってしまわないように映像に残し、英語を使ってそれを世界へと伝えること、それが私の「使命」だと気づいたからです。振り返ると、迷いの多い人生ですが、北海道での部活、報道記者の経験、そしてバングラデシュでの協力隊活動と経験が積み上がっていく内に、自分のできること、道が定まってきたように感じています。

親愛なる後輩たちへ。迷うことは決して悪いことではありませんよ。何がやりたいのか、迷い、もがきながらも、今までさまざまな人たちが育ててくれた自分を信じ、前に進んでくださいね。

可能性を狭めてしまうのは、『自分自身の意識の壁』

川島桜也

1996年生まれ。岐阜県岐阜市出身。麗澤瑞浪中学・高等学校卒業。平成26年東京大学教養学部理科二類に進学。平成28年東京大学理学部地球惑星物理学科３年生。東大水泳部水球陣に入り、ドライバー（フォワード）として活躍。

中学入学時の成績は、校内でも中の下ぐらい。その頃は、お世辞にも優秀と言えなかった川島君が、どのような経緯で東大を目指すようになり、見事に合格を手にすることができたのか、色々と教えてもらいました。

東大を意識したきっかけ

中学生の頃は、東大受験は全く意識していませんでした。勉強が得意だったかと問われれば、計算することが少し速かったという程度です。勉強は嫌いではなかったので、継続するうちに徐々に成績が伸びていって、中学3年生の頃には、初めて学年でトップになることができました。その頃の進路意識は、何となく地元の医学部にでも行けたらいいなという軽い考えしかありませんでした。しかし、高校に進学後、東大出身の先生に2年間担任を受け持っていただくご縁がありました。そして、「あなたは東大に向いている、がんばって目指しなさい。」と言われ続けたのを覚えています。正直そのときには、あまり意味が分かりませんでした。高校3年生の夏に、友達と2人で大学見学ツアーと称して、関東の大学を見て回りました。受験生には大切な時期だったので、反対する声もありましたが、この時も、担任の先生が背中を押してくれました。ワイワイと賑やかなところが大学なのかなと漠然と思っていたのですが、東大に行った時にはそのようなことがまったくなくて、「ああ、ここが学問の聖地か」と感じられました。その帰り

に、湯島天神にお参りに行って、東大を目指すことを誓いました。担任の先生には、どこか無難な大学で手を打とうとしている自分の逃げ癖を完全に見抜かれていたのだと思います。今思えば、担任の先生が、自分のことをしっかりと見極めた進路指導をしてくださったのだと感じています。今となっては感謝の言葉しかありません。

実際に東大に入学してみて感じたこと

最高の環境を手に入れたという感じです。担任の先生が、私に東大を進めてくれた理由が、入学して初めて分かりました。中学生の頃から、教養のある先生方とお話をするのが好きでした。特に中学生の頃は、宇宙のことが大好きな担任の先生（理科）、高校生の頃は、東大出身の担任の先生（数学）の部屋に行っては、さまざまな話をしました。先生のところに行くと、質問した以上のことが返ってくる。これが面白くてたまらなかったのです。まだ知らないことを知る、分からないことが分かる、私の知的好奇心を存分に満たしてくださいました。

このような性格なので、東大は私の知的好奇心を満たしてくれる最高の環境だったのです。友達には、自分でファンドを募って研究資金を集め、新しい研究に打ち込む環境を自ら作り出す人、自ら起業して、学業と両立してビジネスを展開する人、資格を多数取得する人など、自分の目標に向かってがんばる友人がたくさんいます。大学の教授陣も、情熱があり、自分の研究について本当に楽しそうに目を輝かせて語ってくださいます。ものすごい刺激をもらっています。

勉強ができるようになるには

特にコツなんかありません。強いて言うならば、自分の思考パターンや興味関心についてよく理解することが、自分にあった勉強パターンを見つけるために大切なのではないでしょうか。私は、とにかく新しいことを知ることが楽しくて仕方がない性格でした。だから、新しいことを習う学校の勉強は大好きでした。そのような私の勉強方法は、もちろん予習中心。どんどん教科書を読み進めて、自分で勉強していました。おかげで授業中の先生の説明もすんなりと理解ができました。そして、分からないことがあれば、とにかく先生に聞きに行く。あとはひたすら反復です。受験生の頃は、どうしても興味が持てない科目や分野もありましたが、その段階では「必ず東大に入るんだ」という目標を持つことでカバーしました。

分からないことがあったら質問するという、とても単純なことですが、これがなかなかできない人も多いのではないでしょうか。まずは、時間を割いて質問に答えてくれる信頼できる先生を見つけましょう。そのような先生と出会えれば、勉強が面白くなると思います。

勉強が好きになった原点

私の家庭は、両親が共働きだったので、兄弟3人で過ごしていた時間が多かったような気がします。私の知的好奇心が育った原点には、2つ上の兄の存在が大きかったです。両生類、爬虫類、魚類に昆虫と、さまざまなものに興味を持って楽しそうにしている兄と一緒にいるのが大好きでした。休みの日には、ずっと兄について回っていました。兄は、キノコがとても嫌いで、その反動からか菌のことを一生懸命に調べて、今でもやたらと菌には詳しいです（笑）。それぞれ大学生になった今でも、兄と話をするのがとても楽しいです。今考えてみると、好きなことをとことん追求する兄の背中を追いかけてきたのかも知れません。我が家は、両親から勉強しなさいと言われた記憶はありません。同時に、好きなことを追求することを否定されたこともありません。新しいことを知ることが大好きな僕の性格は、家庭での生活に原点があります。大学3年生以降の専門学部を決めるテストでは、理科二類のクラスの中でトップの成績でした。自分が、他の東大生から勉強を教えてくれと言われるなんて想像もしていませんでした。とにかく、新しいことを知ることが楽しくて、勉強を継続していた結果ですね。

川島君から受験生にメッセージ

「自分が東大なんて……」とあきらめたら希望は絶対に実現しないけれど、あきらめずに努力をすれば叶えられるものだと思います。東大入学は、誰にだって可能性があります。校内順位の下からスタートした自分だってその一人です。自分自身の可能性を狭めてしまうのは、「自分自身の意識の壁」が大きいと感じます。

勉強が楽しいと感じられる人は、是非とも東大を目指してほしいです。中学・高校時代をどのような環境で過ごすのか、周囲の環境から受ける影響はとても大きいです。私の母校は、先生との距離感がとても近かったのも魅力でした。自分の可能性を見い出してくれた担任の先生は、お父さんみたいな存在でした。性格の形成に関わった家族、一緒に勉強をがんばった友達の存在が大きかったです。

それと、東大に行ってショックだったことは、トイレのスリッパもまともに揃えられない人が多いという事実でした。ものすごく当たり前のこともきちんとできないような人間になってはいけません。勉強以外のことにも意識を持って生活してください。

勝利の方程式＝自分の長所を活かすこと

奥村大聖

1997年生まれ。岐阜県土岐市出身。麗澤瑞浪中学・高等学校卒業。平成28年名古屋大学経済学部に進学。高校時代は、級長や水泳部主将など学校のリーダーとしても活躍。

奥村君が挑んだ試験は、センター試験後に行われる推薦試験。志望理由書600字、社会的・経済的関心事800字の作文に加え、面接の準備が必要であり、二次試験を前にして準備の負担は決して少なくありませんでした。担任の指導によっては、受験を控えさせるケースもあるほどです。その中で、見事に合格を手に入れた奥村君。彼がどのような中学・高校時代を過ごしたのかを紐解くことで、合格のポイントを探ってみたいと思います。

名古屋大学を志す

地元にあるレベルの高い国立大学だったので、中学生の頃から漠然とはしていましたが、名古屋大学合格を目標に掲げていました。私の母校では、プレミアム講座という成績上位者を対象とした講座が開講されています。そのプログラムの中に、名古屋大学出張講義が組み込まれていて、名大教授と直接お話をして交流する機会にも恵まれました。教授方は、とても気さくに話をしてくださいました。この経験により、ますます名大に入りたいという気持ちが強くなりました。

面接に必要な力

面接試験では、3人の教授と経済に関する話を20分間しました。ほとんどの質問にはきちんと答えられましたし、さまざまな時事問題についても自分なりの意見を持っていたので、きちんと会話をすることができました。面接の手応えは十

分にありました。このような力をどのようにして身につけたかと問われれば、一つは私の家庭環境の影響、もう一つは、学校で与えられた数々の学びの機会だと思っています。

まず私の家庭環境についてですが、私は小さい頃から、両親が見ているニュース番組を一緒に見て、その内容についてあれこれと話をしていました。親に質問をすれば、調べてでもきちんと答えてくれました。そのおかげで、小さな頃から社会や経済に関して興味を持つことができました。高校生になってからも、夜のニュース番組は欠かさず見ていましたし、選挙特番などは大好きな番組の一つでした。興味を持って手に入れた膨大な知識は、面接試験においてはものすごい財産となりました。

学校で与えられた学びの機会については、名古屋大学出張講義以外にも、麗澤大学出張講義、その他の大学の出張講義、社会人による講話などさまざまありました。私はそのような機会があれば、必ず参加していました。麗澤大学経済学部の先生は、マイケルサンデルの『これからの正義の話をしよう』や『それをお金で買いますか』などの本を紹介してくださいました。面白そうだと思って、すぐに読みました。また、経済学部の教授が、今までの理論だけでは説明のつかない経済の現状などを、非常に興味深く話をしてくださいました。高校時代に経済学部の先生の話を聞く機会があったおかげで、最先端の知識も身に付けることができました。同時に、自分の学びたいことは間違っていないなと確認することができました。

中学時代

私が中学生の頃は、得意科目も苦手科目も、がむしゃらに勉強した記憶があります。中学に入ってからは、小学校の頃の曖昧な成績の表現ではなく、毎回の定期テストで1位からビリまで順位が示されます。負けず嫌いな性格の私にとっては、これが学習に対する大きなモチベーションになりました。一貫校なので高校受験はありません。中3の最後までしっかり授業をしてくれたこと、高校の内容を先取りしてくれたことも、大きな魅力でした。海外研修では、ホームステイが企画されており、英会話の重要性を肌で感じることができ、英語学習に意欲的になりました。先生方は、高校の受験指導も担当しているので、中学生の私たちに対しても、早い段階から大学受験の厳しさや受験指導のノウハウを活かして、中学の範囲でなくても、受験に役立つ情報を教えてくださったので、高校に入ってからの授業が理解しやすかったことを覚えています。

高校時代

高校に入ると、学習する内容の難易度も上がれば、範囲も広がります。さらに宿題の量も一気に増えます。時間がいくらあっても足りない状況になってしまいます。そこで大切にしたのは、学校で配られる進路手帳を使って、1週間単位できちんと学習の計画を立てることでした。これで何をすべきか分かりやすくなり、モチベーションを高めることもできたし、やらなければという使命感を持つこともできました。たとえ計画通りにいかなかったとしても、自分のやるべきことが明確になっていたし、やれていない現状なども自分で把握できていたので、計画を立てることはとても大切だと感じました。それと、時間を効率よく使うこと。通学中や歯を磨いている時間に至るまで、少しの空き時間を有効活用して勉強することを心がけました。放課後や長期休み中の進学講座は、高校1年生の段階から受験を見据えた勉強ができたので良かったです。授業が終わった後、先生方のところに質問に行くと、親切に分かるまで教えてくださいました。受験期には、添削指導や面接指導など、忙しい時間を割いて指導をしてくださったので、とても感謝しています。

受験指導を担当した担任コメント

受験に必要な実力を身につけるためには、大きく分けて3つのポイントがあります。1つ目は、考える力を身につけること。多くの生徒が陥ってしまうのは、点を取るために覚えるだけの勉強に走ること。これはエネルギーの向ける方向が間違っています。我流に走ってはいけません。実力を身につけるためには、授業やテストにおいて、考える癖をしっかりとつけましょう。

2つ目は、きちんと自習ができるようになること。受験期には、多くの時間を志望大学の過去問を解くなどの自習に費やします。自習に集中して取り組むことができるようにするために、本校では中学1年生からかなり多くの自習時間を設けて、来たる受験期に向けて繰り返しトレーニングをしています。

3つ目は、メンタルを鍛えること。難関大学には、半年や1年程度の努力では受かりません。長期間、厳しい努力を続ける必要があります。受験本番に効いてくるのは、自分自身を追い込んだ経験がどれだけあるかということです。スポーツに打ち込んだ生徒が受験でも実績を残す理由は、ここにあります。また、自分自身が本当に行きたいと思っている大学かどうかという見極めも、実力を発揮するためには重要となります。

麗澤瑞浪に学んで

No. 001

佐藤みのり

平成27年度剣道部主将。インターハイ女子団体で2年連続優勝。個人でも2年連続3位入賞。全国選抜大会優勝など輝かしい成績を上げる。法政大学進学。今後は日本代表として国際舞台での活躍も期待される。

私の高校3年間は部活動中心の生活となりました。朝も放課後も休日も、目標達成のことばかり考えて取り組んでいました。選手として出場できる試合がなくなった今、振り返ってみるとそれだけ目標に懸けて取り組めたのは、学校の先生方や友達に支えていただいたことが本当に大きかったと改めて感じました。

先生方は、公欠の多い私たちのために授業をまとめたプリントをくださったり、「大変だろうけど頑張れ」などと声をかけてくださったりして、私は恵まれているなといつも感じていました。友達は、ノートを見せてくれたり、分からないところを教えてくれたりと、困ったときにはいつも助けてくれました。このように、私が苦しいときや困っているとき、必ず誰かが手を差しのべてくれました。その助けは見返りを求めるものではなく、当たり前のようにしてくれていました。それでいて、私たちの大会の結果を聞くと、私たちと同じように喜んでくれたり、悔しがってくれたりして、次への力をもらいました。改めて振り返ると、本当にたくさんの方からたくさんのものをいただいてばかりだったのだと気付きました。自分が頑張っているように見えて、頑張る時間や環境、力を与えてもらっていたのだと思います。そのことに対し感謝の気持ちでいっぱいです。

麗澤瑞浪に入学し、新しい道徳的価値感を学びました。見返りを求めずに道徳を実行するというのは、普通の人間である私に簡単にできることではないと思っていたし、今でもそう思っています。私の3年間は、その価値感にもとづき行動している方々に支えられていた時間だったのだと思います。同様に見返りを求めずに支え続けてくれた存在として、両親のことも決して忘れてはならないと思います。中学の頃までは家族なのだから当たり前だと思っていたことも、それが有難いことなのだとここに来て感じられるようになりました。この想いを忘れないようにしていきたいです。

これから私は大学に進み社会に出ていくことになりますが、与えていただいてばかりだったこれまでから、少しでも人の頑張りや喜びの支えになれる人になっていきたいと思います。

学校図書館司書おすすめ本コーナー

～入口かんたん！奥が深い！！　イチ押し本の紹介～

小6におすすめ

「もしも?」の図鑑 恐竜の飼い方

土屋健／実業之日本社

もしも恐竜を飼うことになったら……。科学的根拠にもとづいて、恐竜の特徴や飼い方を教えてくれる。アロサウルスは生肉が好きなので食べられないよう要注意！ミンミは庭でも飼育できる！もしも恐竜を飼うことになってもこれで安心!? ワクワク空想科学図鑑。

サーティーナイン・クルーズ 1 骨の迷宮

リック・リオーダン／メディアファクトリー

「世界中に散らばる 39 の手がかりを探しだした者は、究極の力を手に入れるだろう」エイミーとダンは 39 の手がかりを求めて旅立つが……。

ドキドキするけど止まらない！物語を読みながら、偉人にも詳しくなる!? 体感型謎解きアドベンチャーシリーズ!!

りんごかもしれない

ヨシタケシンスケ／ブロンズ新社

りんごがある。でもこれはりんごではないかも？実はタマゴかもしれない、宇宙から落ちてきた小さな星かもしれない……。

かもしれないから始まる世界。

ヤモリの指から不思議なテープ

松田素子／アリス館

ヤモリの指を研究したら、接着剤なしのテープができた！痛くない注射器は蚊が教えてくれた!? 生き物の知恵を借りてつくったモノがいっぱい！

中3におすすめ

驚くべき雲の科学

リチャード・ハンブリン／草思社

超強力竜巻や、巨大レンズ雲などの壮大で美しい雲。戦闘機の衝撃波雲、ハリケーンの目の内側などの超レア写真も。思わず叫ぶ「こんな雲見たことない！」

似ていることば

おかべたかし／東京書籍

「卵と玉子」、「火と炎」、「サンデーとパフェ」、似ている言葉の違いを、美しい写真で表す。

見てわかる言葉の本。

ぼくの守る星

神田茜／集英社

ぼくはディレクシア（読み書き困難）という学習障がいの中学２年生。それぞれの苦しさをかかえた友人たちとぼく。お互いを思うやさしさで、ぼくたちは少しの希望を胸に生きていく……。

あたたかいものが心にしみていく感動作。

ゼロからトースターを作ってみた

トーマス・トウェイツ／飛鳥新社

鉄鉱石から電子レンジを使って鉄を、じゃがいもからプラスチックを、コインからワイヤーをつくる？すべて１人で９か月かけてトースターをつくる！パンは焼けるのか？

たった一つの製品に多くの手間と技術がつまってる。

麗澤瑞浪中学・高等学校の図書館は、３万冊を超える図書を備え、年間貸出冊数は 25,000 冊。岐阜県で最も利用されている学校図書館です。司書が旬の本を紹介したり、テーマ別に特集を組んで、「常に新しい空間」を演出しています。

学校・寮見学
随時受付中!
お気軽に
ご連絡ください

学校見学会

【対象 小学生】6/18(土) 10/8(土) 11/19(土)

【対象 中学生】8/23(火) 8/24(水) 10/1(土) 11/12(土)

体験入学（合宿制・通い制）

【対象 小5、6】7/26(火)～28(木)　【対象 中3】8/18(木)～20(土)

学力判定テスト

【対象 小5、6】7/28(木) 無料　【対象 小6】10/8(土) 無料

都道府県別出身者数

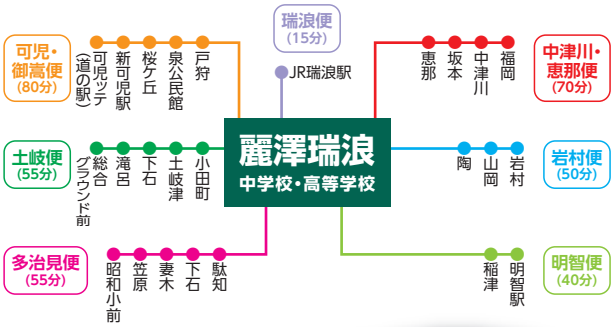
平成28年度は37都道府県から集まってきています。

※中高在校生数：総計755名　※( )内は開校以来の累積数：総計10,246名

交通のご案内

- 中央自動車道 瑞浪 I.C.から約15分
- JR中央本線 瑞浪駅からタクシーで10分

麗澤瑞浪スクールバス路線図



- 現在7路線が運行中
- 安心、安全な登下校

麗澤瑞浪中学・高等学校

〒509-6102 岐阜県瑞浪市稲津町萩原1661
TEL:0572-66-3111　FAX:0572-66-3100
http://www.mz.reitaku.jp

学校法人 廣池学園

□麗澤大学　TEL:04-7173-3601
□麗澤大学大学院　TEL:04-7173-3633
□麗澤中学・高等学校　TEL:04-7173-3700
□麗澤幼稚園　TEL:04-7173-3526